

氏 名	なか じま しんいちろう 中 島 信 一 郎
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	論 経 博 第 288 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	三浦梅園の思索

論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 秀 夫	教 授 根 井 雅 弘	教 授 八 木 紀 一 郎
--------	----------------------	-------------	---------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は三浦梅園の思想体系を徹底して内在的に理解しようとした論文である。そのために著者は、難解かつ膨大な著作として著名な『玄語』全編の読解を行うとともに、それを踏まえて三浦梅園の思考方法についての考察を行った。

上下二分冊からなる本論文は、とりわけ三浦梅園の思考方法に注目しつつ、著者が行った分析成果を要約したのち、『玄語』の読解へと進んでいる。

三浦梅園の主著『玄語』は対命題をもって構成され、世界の諸現象の解明につとめている著作である。扱われている課題は次の通りである。

本宗	陰陽	天地
天冊活部	道德	天神 事物 天命
天冊立部	本神	鬼神 体用 造化
地冊没部	宇宙	方位 転持 形理
地冊露部	天地	華液 日影 水
人部	天人	給資 言動 設施 人道 天命
物部	大物	小物 混物 燦物

対命題様式は『易経』などにも見られるが、『玄語』の論理はきわめて緻密である。このような論理はどこからきたのか。著者はこの問に対する手がかりを、17世紀初め中国に渡来した耶蘇会士の釈義により漢文で出版されたアリストテレスのカテゴリー論である『名理探下巻十倫』（十倫とはカテゴリーのことで、実体、量、関係、性質、場所、能動、所動、時間、位置、状態）に求める。アリストテレスについての記録は、梅園の時代、18世紀中葉のわが国では見られないが、梅園が『名理探』に接した可能性は考え得る。

著者は、梅園の思考に注目して、それが通説にいうように東アジアの伝統的な自然哲学の思考法にとどまらないことを指摘する。すなわち、梅園の思考はアリストテレスのカテゴリー論に多くの点で類似しており、それを受容した可能性があるというのが著者の独創的な主張である。ではいかにしてそのような推定が成り立つのか。著者は当時の梅園が属した思想圏の学問事情を探りながら、梅園がアリストテレスに出会った可能性について考察を展開する。もちろん、気の哲学すなわち陰陽の哲学は梅園の素養の多くを形成しているのであるが、陰陽の哲学だけからは、厳密な『玄語』の論理の成立を説明できないというのが著者の立場である。

このように、本論文は、『玄語』全編の解説、訓読を試みる労作であるが、アリストテレスのカテゴリー論との異同を常に視野に置いて分析する点に、特徴がある。条理とは世界の構成原理である。天地万物、森羅万象の各々が一個の世界である。様々な物からなる多様な世界は、それぞれ存在の特殊な相をもって現れる。そのような特殊な相と構造、変形を明らかにすることが、世界の総体を条理に基づいて分析することであり、したがって、条理はそのような世界の存在と変形を分析する命題と対命題の発生過程ともなる。著者はカテゴリー論（分類）からトピカの論理へ（変化、発展）の推論も条理とし

て理解する。そのための論理の要諦が剖析であり、二分法である。

すなわち、著者によれば、梅園の条理はアリストテレスのカテゴリー論の持つ模一、特一、同名同義、同名異義、泛と切、反と比などの概念を備えたものであった。梅園の思考法は形式論理学としての三段論法には到達していないが、梅園は剖析を要として推理を行っている。存在を言葉との関係で推理することが梅園の手法であるが、その推理において要諦をなすのは剖析である。梅園は、アリストテレスの十倫（10のカテゴリー区分）の三導（直通＝直接的認識あるいは観念、合通＝命題、推通＝推論）のうち直通合通における剖対（剖析と対待）、とりわけ主語述語合通の命題と、それに対待する対命題（命題・裏命題）をもって、物の性理を機能的包括的に推理措定しようとしたのであり、これが『玄語』の論理であると、理解する。

本論文は、このようなアリストテレスの論理学を引証して遂行される、梅園の思索の論理に着目した『玄語』の解説であり、その点に独自性がある。

その要約は困難を極めるので割愛せざるを得ないが、全体の目次は上掲のものに対応する。著者はそれぞれの部分でまず全体の概要を述べ、次に『玄語』に原文と読み下し文を掲げながら、梅園の思考の特徴を解説している。その解説は、詳細を極めている。

論文審査の結果の要旨

三浦梅園（1723—1789）は、くしくもアダム・スミスと同年に生まれ一年早くに没している。梅園の主著『玄語』（1775）は『国富論』（1776）に一年先んじている。梅園は時代的にカントにもいくらか先行している。したがって、18世紀のヨーロッパの自然法思想と対比して梅園の思想にアプローチすることがしばしば試みられてきた。

梅園は主著『玄語』において、気の哲学に基づいて、陰陽の二分法を原理として、あらゆる存在、森羅万象にそれを厳密に援用して、壮大な宇宙哲学、自然哲学を構築した。しかしながら、『玄語』はほとんど絶望的とみえるまでに難解であるとされる大著であり（山田慶児『黒い言葉の空間 三浦梅園の哲学』）、現代人には、研究者にさえ、容易に近づくことの出来ない迷宮である。

この難解な大著に対して、多様な解説（気の哲学の極限としての把握、ギリシア哲学、デカルト、ティコ・ブラーエ、ニュートン、ヘーゲルとの比較など）が試みられてきたように思われるが、そのような多様な解説はいまだ通説を生み出すには至っていない。そのような研究状況のなかにあつて、本論文は、梅園の思考法に注目して、すなわち命題と対命題に始まる条理の論理の展開に注目して、複雑な全体を統一的に読む試みを行った点に最大の特徴と大きな貢献がある。この点での著者の功績は否定すべくもなく大きい。

とりわけ冒頭から87ページまでの梅園の方法論の分析は、稀書『名理探』を参照しつつ行われたユニークな分析であつて、本論文の最も重要な貢献の一つである。著者は、梅園の「剖析対待」を分析して、梅園の剖析が、単に「もの」の分類に止まることなく、アリストテレスの意味でのトピカ的論理（場所的論理）へと進むことを明らかにするとともに、梅園の「反観合一」が弁証法的であるという興味深い、説得的な解釈を行っている。

要旨に述べたように、著者は梅園の対象的世界の分析手法について、アリストテレスを参照枠としつつ、その論理の徹底的な解明に務めている。梅園の手法は三段論法には及んでいないが、存在を言葉との関係で推理する点に著しい特徴があり、その推理の要諦は剖析である。梅園は、アリストテレスの十倫の三通（直通、合通、推通）のうち直通合通における剖対（剖析と対待）、とりわけ主語述語合通の命題と、それに対待する対命題（命題・裏命題）に注目し、このような論理を介して、物の性理を機能的包括的に推理し、措定しようとしたとする著者の『玄語』分析は、迷宮に深くメスを入れる貢献である。

本論文は、アリストテレスの論理学を参照枠として梅園＝『玄語』の思索の論理を分析し、その特長を浮かび上がらせようとした試みであり、その点に独自性がある。

さらに、本論は壮大なテキスト『玄語』の解説に捧げられているのであるが、複雑で難解なテキストを解説し、訓読を行い、現代人に接近可能なテキストにした（現代語訳と注釈）という、テキスト形成の貢献を指摘しなければならない。

古典的文献の場合、その現代語への翻訳自体に独自の価値があることは、指摘するまでもないであろう。他にも試みがあ

るように思われるけれども、この仕事を成し遂げることは容易なことではなく、著者の業績としてその価値を高く評価しなければならないであろう。例えば、梅園研究の権威と目される山田慶児の前掲書にしても、テキストの詳細な分析を行ってはいないものの、テキストそのものは前提されていて、その分析の成否を検証するためには改めて原テキストに当らねばならず、この点で、著者の労は貴重である。

しかしながら、本論文にはまたいくつかの課題も残されているように思われる。

第一に、アリストテレスのカテゴリー論との比較分析は、十分に興味深いし、高度な説得力を感じさせる力業であるけれども、アリストテレスの論理学を実際に三浦梅園が知っており、それを駆使したという証明に至っていない。著者は、江戸の学問事情に分け入って、状況証拠を積み重ねているけれども、論証は推定に終わっている。『名理探』を実際に梅園が利用したという証拠を見つけて、論証を裏付けることが課題として残されている。

第二に、これは叙述の仕方に関わるが、本論文は、主要部分が『玄語』の読み下しと逐次的な解説からなっているために、全体として豊富な内容の解説をもつとはいえ、議論が分散的、断片的で、十分に総合されていない。『玄語』の現代語版とは別に、分析成果を総合し、その総体を要約した見通しのよい結論の章が欲しい。

第三に、これは立場にかかわるが、「もの」の分類からトピカへという著者の重要な主張にもかかわらず、森羅万象の分類学としての古典主義時代のエピステーメーに着目したフーコーの研究を参照して、梅園の思考様式の分類学的独自性をもっと押し出すべきではなかったかと思われる。梅園の思考様式は陰陽二元論の徹底であるとともに、西洋における機械論的世界観から進化的世界観への移行を媒介した徹底的な分類の思想に近似したものであるように思われるからである。この分類の思想の評価と位置づけができれば、東西比較思想史の視野において梅園の思想をより明確に位置づけることが可能となり、梅園の歴史的独自性がさらに明確になるであろう。梅園の論理においては空間と時間が一体であるが、それは現象の特殊な生成の論理以前のものであろう。しかし、そこによくも悪しくも梅園の独自性があったのであり、現象世界のタブロー、ないし地図の厳密な構成論と博物学的思考の意味があったのではないだろうか。

このような課題と疑問が残されているにしても、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成14年10月30日、論文内容の審査とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。